

5. 三谷の過疎化

神 邊 智

- I. はじめに
- II. 三谷小学校卒業者の居住地
- III. 少子化、高齢化そして過疎化
- IV. 過疎化の過程
- V. 過疎化と向き合う
- VI. おわりに

I. はじめに

三谷に限らず、日本全国において少子化、高齢化が進み、これからの日本での大きな社会問題ともなっている。三谷を初めて訪れたとき、私はある不思議な感じに襲われた。町で会う人々はほとんどが私たちの親の世代よりも上で、また子供を見る機会も少なかった。現在都市部に住む私たちにとって初めてその少子化、高齢化という現状をまざまざと見せつけられたように思う。そして私たちの多くが少なからず衝撃を受けた。

三谷は昔から農業、林業で生計を立て栄えてきた。その後農林業は衰退していき、それとともに人々の仕事場も移り変わっていった。大聖寺、小松市、金沢市、福井といった県内外の近郊や、大阪、東京といった大都市圏に職を求めていったことによって、時代の移り変わりとともに転出者の数を増やしてきた。それによって地区全体の人口が年々減少し続けているのだろう。本稿では、地域住民の少子化、高齢化と地区の過疎化の現状とそれに対する住民の捉え方、今後の展望について述べていきたい。

II. 三谷小学校卒業者の居住地

三谷地区内（百々、曾宇、直下、日谷）には三谷小学校という小学校が一つだけあり、現在では

百々、曾宇、直下、日谷、美谷が丘に住む子供たちが通学をしている。美谷が丘がまだない頃は、細坪の子供たちが山を越え通っていたそうだ。その卒業生の氏名、居住地を記録した「三谷小学校同窓会会員名簿」にて、1994 年当時の小学校の卒業生の居住地を知ることができる。当時 23 歳から 64 歳であった、1942 年度から 1983 年度の卒業生 1066 人（死亡者、居住不明者は除く）を対象に統計をとり、まとめた結果が表 1 である。なお、この範囲の統計をとったのは、それがおよそ学生生活をおえ、社会に出て定年をむかえるまでの年齢であるからだ。

表 1 三谷小学校卒業生の居住分布（1942 年度～1983 年度卒業生）

地域		男性	%	女性	%	計	%
A	三谷地区	245	44. 1%	85	16. 7%	330	31. 0%
B	美谷が丘	29		12		41	
C	細坪町	6		6		12	
D	幸町	6		1		7	
E	白鳥町	4	25. 4%	3	49. 0%	7	36. 7%
F	山中町	6		23		29	
G	大聖寺	35		78		113	
H	その他加賀市内	55		127		182	
I	金沢市	25		32		57	
J	小松市	11	7. 9%	24	14. 1%	35	10. 9%
K	その他石川県内	8		16		24	
L	北陸	7		15		22	
M	関西	38		40		78	
N	中部	18	22. 7%	9	20. 2%	27	21. 5%
O	関東	54		36		90	
P	その他国内	8		3		11	
Q	海外	1		0		1	
計		556		510		1066	

三谷小学校「三谷小学校同窓会会員名簿」より（死亡者、居住地不明者を除く）

居住地域の区分は以下のとおりである。A：三谷地区（百々、曾宇、直下、日谷）、B：美谷が丘、C：細坪町、D：幸町、E：白鳥町、F：山中町、G：大聖寺、H：その他加賀市内、I：金沢市、J：小松市、K：その他石川県内（羽咋市、根上町、寺井町 etc.）、L：北陸（富山県、福井県）、M：関西

(主に大阪府)、N：中部、O：関東（主に東京都）、P：その他国内（北海道、広島県、大分県 etc.）、Q：海外（アメリカ）。なお、それぞれの転出時期、その後の移動の経緯については不明である。

三谷在住者は、1066 人のうち男性が 245 人（男性の 44.1%）、女性が 85 人（女性の 16.7%）、計 330 人（全体の 31.0%）である。男性の半分弱、女性の約 6 人に 1 人が三谷に残っている割合となる。男性と女性との割合がここまで広がるとは予想外ではあったが、女性は他地域へ婚出して行くことが多くなっていることを表しているものだと考えられる。

転出者の居住地として多いのは三谷からそう遠くない大聖寺などを代表とする近郊地域である。全体の 36.7%もの人たちがこの地域に転出している。大きな理由として考えられるのは、通勤、通学、あるいは日常生活においての往来が容易な地域であるからだと思う。これについては後ほど詳しく述べることにする。

次に続くのが県外へ転出している全体の 21.5%の人たちであるが、これは仕事を求めて出て行った人たち、また大学などの教育のために外に出て行った人たちがそのままそこで就職、または結婚することによってその地域に居残るというケースが増えているようだ。金沢市などを含む県内地域でも同じような理由が言えよう。

名簿に記載されている旧姓から正確ではないにせよ女性の既婚、未婚者の区別ができる。そしてその内の既婚者の中で三谷から婚出した人の率を導き出してみた。それを表したのが表 2 である。

表を見て分かるように婚出する人の割合が非常に高いことがわかる。一番割合として低かったのが 1946 年度の 65%であり、半分以上は三谷以外へ転出している。その他 1962、61、65～67、71～73、78、80～83 年度には既婚者の婚出率は 100%となっている。全体的に見ても、既婚者の約 90%が婚出している。女性のほとんどが三谷以外の地へ嫁いでいくことがこの表より読み取れる。

婚出先は実に様々であるが、先程の表 1 で示されていたように比較的三谷に近い大聖寺など加賀市内に集中しているようである。

昔は集落内での結婚というのが多かったと話をよく聞いていたのだが、この表から読み取る限りではその傾向は少なくとも 1950 年代以降には無くなってしまったのであろう。

表2 三谷の婚出者率

年度	女性	概婚者	婚出者	%
1942	9	6	5	83
1943	15	15	13	87
1944	17	14	10	71
1945	15	14	10	71
1946	20	17	11	65
1947	16	11	9	82
1948	17	17	15	88
1949	21	18	14	78
1950	16	14	11	79
1951	16	13	11	85
1952	7	6	6	100
1953	18	16	15	94
1954	19	18	17	94
1955	16	13	12	92
1956	23	20	19	95
1957	18	18	17	94
1958	9	8	6	75
1959	27	25	23	92
1960	17	14	12	86
1961	24	24	24	100
1962	20	16	12	75

1963	21	20	19	95
1964	7	6	4	67
1965	10	10	10	100
1966	12	12	12	100
1967	11	11	11	100
1968	6	6	5	83
1969	10	8	7	88
1970	7	6	5	84
1971	11	8	8	100
1972	6	4	4	100
1973	4	4	4	100
1974	10	6	5	83
1975	11	8	7	88
1976	6	5	4	80
1977	9	9	6	67
1978	6	4	4	100
1979	5	3	2	67
1980	7	3	3	100
1981	13	8	8	100
1982	5	1	1	100
1983	6	1	1	100
計	543	460	402	87

三谷小学校「三谷小学校同窓会会員名簿」より

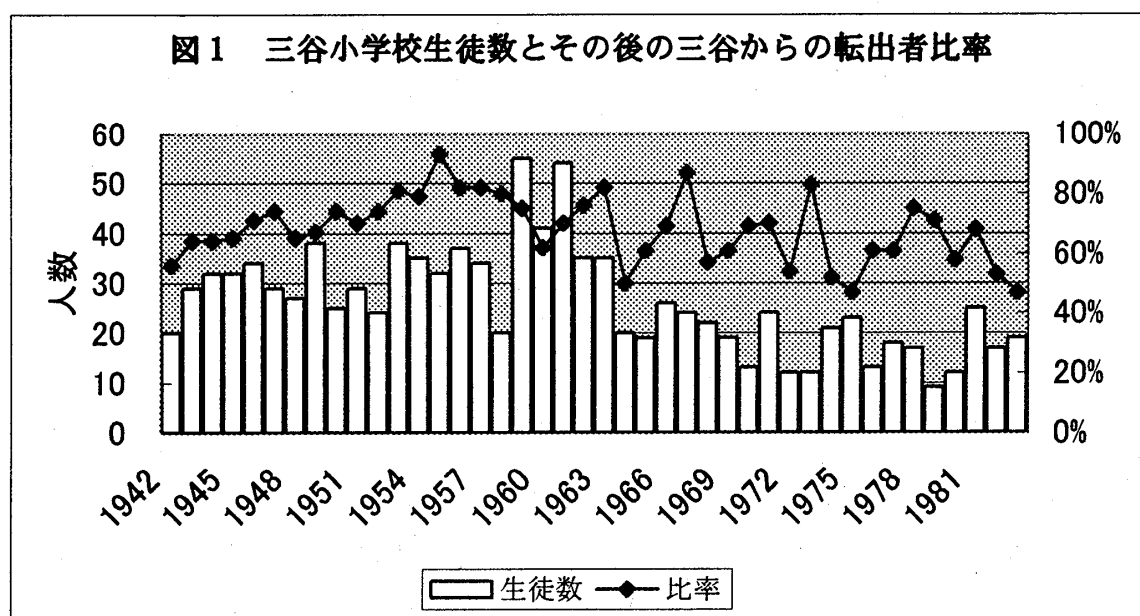
III. 少子化、高齢化そして過疎化

少子化、高齢化が近年の日本の社会問題として取り上げられるようになった。三谷地区も時代とともに転出者の比率が年々増加し、近年特に増加したことによって少子化、高齢化が大きな問題に

なったものだと私は予測していた。先程の三谷小学校同窓会会員名簿をもとに年度ごとの生徒数、また卒業後三谷から転出していった人たちの比率をグラフにしてみた。

比率に注目すると転出比率が50%を下回った年が1975年度、1983年度の共に47%という比率である。他の年度はいずれも50%を上回り、卒業生の半分以上の人たちが三谷を出て行っていることがわかる。三谷から転出していく人は近年になって増加したわけではなく、戦後早々から多くの人たちが三谷から転出していったようだ。

昔と近年を比較して転出者の比率にはあまり変化が見られないわけであるが、少子化と結びつけて考えると実際には大きな違いがある。農林業を生活の基盤としていた昔は、多子ということもあり子供全員が家元に残って生活していくスペースがない。それゆえに多くの場合長男を残して、他の者は転出していった。つまり誰かしら必ず一人は家に残る形になっていた。しかし近年では少子であり昔のような問題は無くなった。しかしなお人も転出していく。これは家元に誰一人として残らないという選択も含むこととなる。若い人たちの多くが地区に残らず転出していくということは高齢化にもつながることとなる。



三谷小学校「三谷小学校同窓会会員名簿」より（死亡者、居住地不明者を除く）

次に生徒数に注目してみると1959年度から1961年度の3年間（55人、41人、54人）が最も卒業生徒数が多かった年度であり、これは第2次大戦後のベビーブームの影響であった。戦中の日本では子供を増やすよう政策が立てられていた頃である。しかしそれ以降、近年になるにつれ、生徒数は徐々に減少していき、20人を超す年も少なくなっている。聞き取り調査からの情報ではあるが、2003年度三谷小学校の新入生の数はわずか4人だったそうだ。三谷地区では少子化と高齢化の

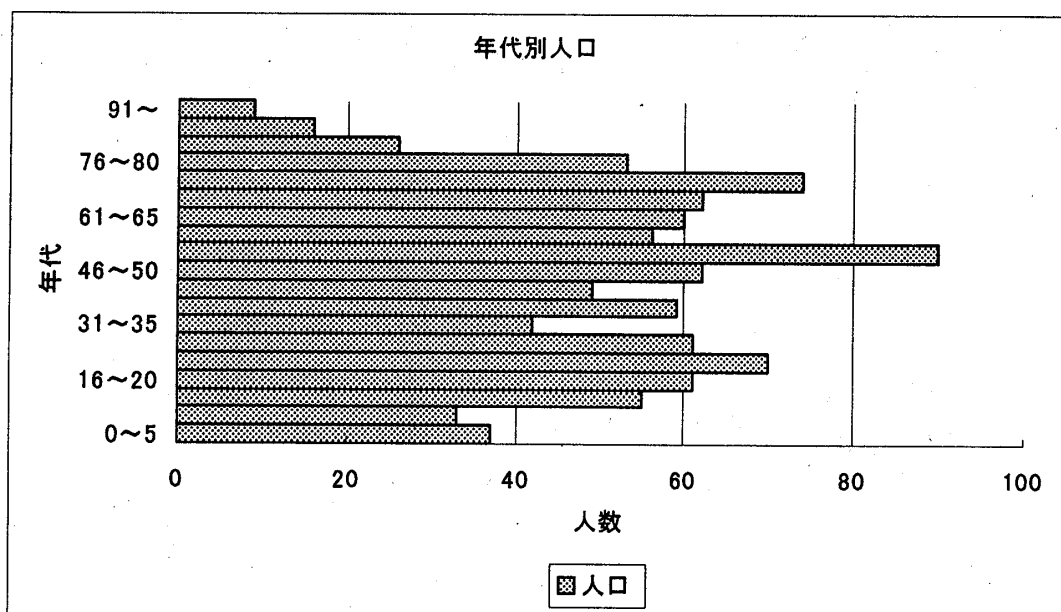
結果としての児童数の減少が目に見えて進んできている。

少子化が進んでいる要因となっているのは全国的な傾向、つまりは夫婦あたりによる子供の数そのものの減少、そしてもう一つの理由となるのが高齢化によって再生産年齢層の夫婦そのものの数が少ないといったことが挙げられるだろう。このように少子化、そして高齢化は複雑に絡み合い、互いを促進させているのである。

先程とは違った視点で少子化を見るために 2003 年度現在の百々町、曾宇町、直下町、日谷町を合わせた三谷地区としての人口を 5 歳ごとに区切った年代別人口をグラフにしてみた。

先ほどと同様ベビーブーム世代は 90 人もの人口であるのに対し、近年の子供の数は 0～5 歳未満で 37 人、6～10 歳未満で 33 人とベビーブーム世代の半分もしくはそれ以下となっている。近年の人口から見ても少子化が目に見えてきている。

図2 三谷（百々、曾宇、直下、日谷）の年代別人口 ～2003 年度



加賀市百々町、曾宇町、直下町、日谷町住民票より（2003 年 4 月現在）

少子化が進み、また三谷からの転出率が戦前から 50%以上を維持してきている。それに加え婚入者を含め人口転入が少ないことから全体としての人口も減少しつつあるようだ。2000 年から 2002 年までの三谷地区の集落別の世帯数と人口の変化は表 3 のようになっている。

細坪町、白鳥町、幸町、美谷が丘を含めた三谷地区としての人口ではあるが、2000 年に 2150 人、2001 年に 2124 人、2002 年に 2077 人と徐々に減少していっているのがわかる。なお直下町で若干増加している部分は慈妙院のためだと考えてよい。慈妙院とは集落内にある市の運営する老人ホームであり、ここに 100 名をこえる高齢者たちが生活している。しかしその人たちには日常的な三谷の

生活とはあまり関わりが無い。

今まで転出者についてのデータをのせてきたのだが、転入者は婚入者を含め、あまりいないということである。三谷地区の特徴と言えるのが、三谷に昔から住んでいる顔なじみの人しかいないということだ。「町に住む人たちは皆昔からの付き合いがあり、気をゆるせる人たちしかいない。」このようにY氏（70歳代の男性）は私に話してくれた。転入者についての確かなデータは特にはないのだが、婚入者が少数いるだけであるとの話を聞いた。

表3の世帯数に注目してもらいたい。美谷が丘などと比べて日谷、曾宇、百々はともに増加していないことがわかるであろう。直下における世帯数の変化は慈妙院における変化であり、直下町の集落そのものの世帯数の変化ではないようである。外から移り住んで来る世帯は全くないと言っても過言ではないであろう。

表3 世帯数と人口（2000年～2002年）

町名	平成12年1月1日 現在		平成13年1月1日 現在		平成14年1月1日現在			
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口		
						総数	男	女
三谷地区 計	714	2150	721	2124	714	2077	980	1097
日谷町	86	322	84	311	85	308	146	162
直下町	167	339	174	350	172	351	143	208
曾宇町	95	403	95	396	95	375	180	195
百々町	20	67	20	60	19	57	29	28
百々町住宅	5	11	5	12	5	12	5	7
細坪町	24	94	25	94	24	93	45	48
白鳥町	102	331	104	332	100	319	150	169
幸町	108	236	106	227	103	219	106	113
美谷が丘	107	347	108	342	111	343	176	167

2002年度三谷、南郷、塩屋地区の世帯数、人口数（加賀市役所市民課より）

IV. 過疎化の過程

三谷は農林産業で栄えてきた地域であり、田んぼ、桐の実の油や炭焼きなどで地域全体を支えていた時代が1950年代後半頃まであった。しかし時代と共に農林業が衰退し農家としてやっていけなくなったこともあり、外へと仕事を求めていく人が多くなった。昭和初期から現在まで大聖寺に現在もある大同チェーンが主な就職先となり、多くの男性はそこで働いていた。長男は家や土地を守る必要があり、三谷に残り大同チェーンのような大聖寺などの近郊へ勤めに出る人が多かったようだが、次男三男は積極的に大都市である大阪、東京、名古屋といった地に仕事と生活を求めて出て

行った。農林産業が衰退する以前からこの傾向は強く、長男は家に残り農業を営み、次男三男は家を出て外へ働きに出て行くことが多かったと聞く。外へ出ていった人たちのほとんどはそれから三谷に戻って移り住むということではなく、そのまま退職してからも三谷へ戻ってくることはなかったようである。

三谷の人たちは現在も買い物に行くのに 8 号線を越えた大聖寺などに行く必要がある。三谷地区内に商店が並ぶというようなところはなく、また学校も小学校までしかなく、中学校以降は大聖寺や他の地域に位置する学校へ通う必要がある。三谷にはバスが通っていないので学校や職場へ通うには時間もかかり、子供には危険もともなう。日谷にある家の中学生の話では学校まで 40 分もの時間をかけ、5~6 人のグループを組み歩いて登校しているそうである。そういった普段の生活や通勤、通学における不便さを受け、三谷を離れ、大聖寺や黒瀬町、南郷町といった通勤、通学などにより便利な地区に移り住むことを選択したりする人も多くいるようだ。

また三谷地区内の居住範囲にも変化が見られるようになった。奥谷と言われる日谷、直下、曾宇の 3 つの集落の上流部から平地にある田んぼを整地するなどして、より谷の入り口付近まで出て来て住む世帯も増えてき、全体的に谷から出てくる形になってきているようだ。特に日谷、直下はその傾向が強く、日谷ではゴルフ場から山中町へとつながる道路付近に、直下では百々と道を挟んだ向かい側に比較的新しく建てられた家々を見ることができる。昔は田んぼが広がっていたところにどんどんと出てきている。三谷地区での生活は、農林業が盛んで野菜などをある程度自給していた時代とは異なり、スーパーなど日用品が揃う大聖寺などの街により大きく依存する現代的な生活になってきたということが見受けられる。

商業を発展させるのに壁となったのは三谷地区の地形の問題であると、T 氏（70 歳代の男性）は話してくれた。地区のほとんどが谷間にあり、平地に出て行くまでに非常に細い道をたどっていかなくてはならないような環境だ。8 号線という主要な道路が車で 5 分ほどしたところにあり、沿道に店を構えて商いをすることで商業が発展しそうではあるのだが、この道路は周辺の土地より高くなっており、沿道で店を構えるなどということができない。食事処が一軒店を構えるだけである。

商業も発展することができなく、また大きな温泉や特産品を持たない三谷は集落自体として発展することができなかった。このようなことが原因となり、過疎化へと結びつくこととなったように思われる。

V. 過疎化と向き合う

聞き取りによって実際に住んでいる人たちがどのように過疎化ということを感じており、またこ

の過疎化と向き合う上でなんらかの対策というものは考えられているのかどうかということを知りてみた。

結論から言うと対策はあまり考えられていないということである。個人レベルにおいては対応が困難な問題であり、住民たちが唯一できることといえば住居を少しでも生活の便がよくなるよう移すことだろうか。ならば市や県としてはどう考えているかということなのだが、市や県も具体的な対策を考えるまでには至っていないようである。住民からの話を聞く限りではそのような話をあまり聞かないとのことである。南加賀道路という道路を 8 号と平行する形で建設中ということではあるが、これは直接三谷の活性化を目指したものではない。三谷までバスの路線を新たに設けるというような積極的な施策は全く聞いていないそうだ。

住民たちは過疎化というのは自然の流れであり、全くもって仕方のないことだという様子に感じているそうだ。仕事をしようにも三谷内でできる仕事というものが少なく、地区内の不便さは仕方のないもので、そのため人が出ていってしまうこともどうしようもないことというように住民の人たちは話していた。

私自身も初めて地域の過疎化と向き合って感じたのであるが、どうしようもない無力感に駆られた。市、県や国のレベルであれば何かしら対策としてできることがあるのかもしれない。しかし、個人のレベルにおいては、どうにかしようという対策を練ることが難しいように思う。

しかし、T 氏（70 歳代の男性）は「私たちがこの地でどう生きていくのかということの方が重要なのだよ。」と語ってくれた。過疎化に対する対策を考えることより、その土地に住む人たちがいかに楽しんで余生を送っていくことかということの方が大事だということである。三谷の人々は様々なグループを作り、ゲートボール、グランドゴルフといったスポーツから、フラワー会、お茶会、また郷土史の会などと様々なことを行っている。昔から馴染みのある顔に囲まれ、共通の趣味を持ち、楽しく日々の生活を送っていくことが最も重要なことなのかもしれない。出て行く人たちのことよりも残っている人たち同士どう生きていくかが重要視されているのである。

子供たちも都会の子供たちと同様に習い事をし、また中学、高校では部活にも積極的に参加できているようである。通学や街に遊びに行くといったことは交通の便も悪く、大変な不便さをこうむるわけではあるが、外部から見た印象ではあるものの、特に過疎地に住む子供だからといったことに縛られている様子は見られなかったように思う。部活から帰ってくるのが遅いときで 8 時を過ぎてしまうというようなことを聞いたが、それはどこの子供でも一緒であるかのように私は思う。子供たちにとっての過疎という影響はそれほど大きくないように思えた。

過疎化に対してどうしようもないという見解も大きいようだが、かすかな期待をよせるものがある。それは南加賀道路という三谷地区内を通る現在建設中の道路である。この道路がつながることによって交通の便は一気に向上し、沿道に店舗を構えられるようになれば商業も発展する。そして

三谷が活性化することにつながると見られている。三谷が活性化すれば過疎化という問題も解決されていくのではないだろうか。だが一方、道路が完成することによって町は活性化するとしても、従来の静かな町のたたずまいが消え去ってしまうということ、また治安が悪くなってしまうというふうな懸念を抱く気持ちもあるそうだ。道路は当初の計画では 1998 年に完成予定ではあったが、2004 年現在もいまだその形を見ることはできない。

VI. おわりに

時代の流れと共に深刻化していく少子化、高齢化、そして過疎化。これらの問題は私たちにとってよく認識されていた問題のようであって、実はそうではなかった。TVなどのメディアを通して、また学校教育の中で学んできた私たちは、この問題について知ったつもりでいただけなのかもしれない。直接肌を通して感じてきたその感覚と、データを見て改めて感じたその感覚は私にとって初めてのことであるかのように思える。

このような私たちが驚いてしまうような状況下にあって、住民たちは落ち着き払い、何事もないかのように生活を送っている。そこには普段の生活があり、少し町の形が変化したけれども、昔から一緒に住んでいる人たちがすぐそばにいて、長年の内で許し合えてきた仲間、友達同士の笑顔で溢れていた。こうした姿は私にとって予想外であつたし、いい意味で裏切られたように思う。過疎化という現状の中、どんどんとさみしい気持ちにさせられていっているのではないだろうか。孤立感、孤独感といったもので縮こまってしまっているのではないだろうか。このような心配はここ三谷の地においては無用だったのかもしれない。三谷には大きな連帯感というものが私には感じられた。そしてそれに対してうらやましい気持ちにもさせられた。もちろん住民たちも心のどこかで人が少なくなっている状況を見てさみしい気持ちにはなっているではあろう。しかし出て行った人たちよりまずは残った自分たちのことを考えようと前向きな姿勢がそこにはあるように思う。

そんな前向きの姿勢に隠されながらも過疎化という大きな問題が存在している。過疎化を抑制または解消するための唯一のかすかな希望である南加賀道路が建設され、完成したとき、この三谷にどのような影響を及ぼすのであろうか。過疎化を解消してくれることができるのであろうか、または平穏な暮らしの妨げになってしまうのであろうか。そこには私の不安と期待、またもちろん地元住民の不安と期待が交錯している。